

作品紹介

『オリジナルコースターデザイン in サッポロ・シティ・ジャズ』
[audio-technical]×[札幌市立大学]
JAZZを愛する街、札幌。その音楽文化のさらなる浸透を願い、札幌市立大学
デザイン学部が株式会社オーディオテクニカとの協働プロジェクトの
ひとつとしたコースターをデザインする活動に取り組んでいます。
サッポロ・シティ・ジャズ2020でも全10種類のコースターが登場。シアター
ジャズライブ会場で使用されました
デザイン学部 若林教授と安齋教授が率いる10名の学生によるデザインチー
ムの作品です。



編集後記

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い世界各国でロックダウンが実施されました。日本では、学校の一斉休校や商業施設の時短営業など日常生活が変化し制限される機会に直面しました。

本学でも、卒業式・入学式が中止され、多くの授業はオンラインになりました。その中で、従来のように学生や教職員が同じ空間に身を置き、顔を合わせたり多様な活動を行ったりする機会が制限され、バーチャル空間での教育が行われました。ワクチンの開発、普及までは一定の制限が続くと予測されるため、日常生活や教育の先行きは不透明といえます。

一方、このような状況下において、地球温暖化による気候変動、資本主義社会や国家の矛盾、社会のあり方、人々の意識や価値観の変化など、現代の課題が一気に噴出したともいえます。このような時代の転換期に身を置いて、私達の思考や行動の指標となるものは何でしょうか。今回のテーマは「時代が変わるとき」としました。古今東西・多種多様な書籍のエッセイが、少し先の生活や生き方を考えるヒントになればと願っています。

編集委員一同

札幌市立大学附属図書館ニュースレター のほほん第14号

編集 札幌市立大学図書館運営会議
編集委員 藤井 瑞恵 片山めぐみ
矢野祐美子 金子 晋也

発行日 2021年1月20日

発行 札幌市立大学附属図書館
〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
事務局 地域連携課 図書館担当
TEL.011-592-2346

制作・印刷 三浦印刷株式会社

ご感想をお聞かせください。
library@scu.ac.jp

UD FONT 見やすいユニバーサルデザインフォントを
採用しています。



札幌市立大学
附属図書館
ニュースレター

の ほ ほん

第14号
2021年1月

ロゴマーク デザイン学部メディアデザインコース1期生 木村 尚史



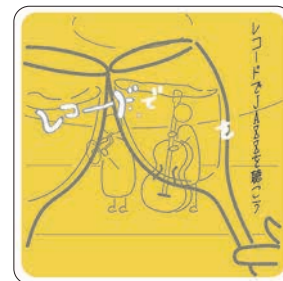
小泉 花乃



小島 千乃



澤田 春風



鈴木 萌乃



竹内 菜実



中茂 裕貴



古内 あやな



森宗 優香



山岸 小百合



山田 実来

特集 「時代が変わるとき」

Black Lives Matterによせて
デザイン学部 准教授(共通教育) ———— 松井 美穂

看護記録の電子化とその功罪ー坂の上の雲をめざしてー
看護学部 教授(看護管理学領域) ———— 佐藤ひとみ

テイクの世界からギブの世界へ
デザイン学部 准教授(人間空間デザインコース) ———— 小林 重人

ネガティブ・ケイパビリティを味方につける
看護学部 教授(母性看護学領域)・助産学専攻科長 ———— 荒木 奈緒

自分の“メガネ”を作り出せー例えば意味の共有、ただの偶然、変化の本質へ
デザイン学部 准教授(共通教育) ———— 丸山 洋平

当事者研究と精神医療の時代
看護学部 講師(精神看護学領域) ———— 伊東健太郎

群れることへの欲求
デザイン学部 教授(共通教育) ———— 町田佳世子

変化を恐れないー新しい世界を作るのは皆さんです
看護学部 准教授(基礎看護学領域) ———— 大野 夏代

身近なものにもう一度、目を向けてみよう
デザイン学部 教授(人間空間デザインコース) ———— 椎野亜紀夫

学生の本にまつわる話
人と会えなくなった「今」だから気づいたこと ———— 看護学部2年 古舘 樹
本が気づかせてくれること ———— デザイン学部3年 畠中 彩

特集：図書館サービスが変わるとき
芸術の森キャンパス・ライブラリー司書 ———— 鈴木 沙里

カウンターの内側からの紹介図書
芸術の森キャンパス・ライブラリー司書 ———— 山田 恵里
桑園キャンパス・ライブラリー司書 ———— 作本 美沙

附属図書館 貸出・視聴ランキング

機関リポジトリのご紹介

『オリジナルコースターデザイン in サッポロ・シティ・ジャズ』

札幌市立大学
附属図書館
SAPPORO CITY UNIVERSITY



https://www.lib.scu.ac.jp/

Black Lives Matterによせて

デザイン学部 准教授(共通教育)
松井 美穂

筆者紹介

専門はアメリカ文学研究(特にアメリカ南部文学、女性文学)、ジェンダー研究。ミシシッピ大学に関しては「のほほん」前号(第13号)でもふれておりますので、関心がありましたらぜひお読みください。



イラスト
デザイン学部2年
江本 千尋

1619年、北アメリカのイギリス植民地ジェームズタウンに、オランダ船によって運ばれてきたアフリカ人奴隷が上陸しました。諸説ありますが、一般にこれがアメリカ合衆国における奴隷の始まりとみなされています。つまり昨年(この「のほほん」が発行されている頃には一昨年)2019年は、ちょうどそれから400年ということになります。およそ400年後の今日、コロナ禍のアメリカにおいて“Black Lives Matter”という標語のもと、人種問題が改めてクローズアップされています。この400年の間に一体何があったのでしょうか。

植民地時代のアメリカは奴隷制を合法化し、開拓を進めて行きました。1776年イギリスからの独立を宣言した時、その中では万人の平等が謳われていましたが、奴隷制度は維持されました。独立後、奴隷制を維持したい南部とそうではない北部との対立が深まり、1861年南北戦争が勃発し、63年にリンカーンによって奴隷解放宣言がなされました。その結果終戦後の68年には公民権が、70年には選挙権が付与され、黒人の状況は向上したように見えました。しかし特に南部は、白人と有色人種を厳しく隔離する、いわゆる「ジム・クロウ法」により差別の構造を維持し、さらに様々な方法で黒人から参政権を実質的に奪い、その社会的進出を押し留めました。この「ジム・クロウ」時代が終わるのは1960年代の公民権運動の時代まで待たねばいけませんでした。しかし公民権運動以降も、様々な問題が残ったのは今日の状況が示す通りです。

私がミシシッピ大学の研究員としてミシシッピ州オックスフォードという小さな町に滞在していた2019年2月のある日、この町に南北戦争で南軍として戦った「南部連合(Confederacy)」を支持するグループが集まり、デモ行進するという出来事がありました。南部の町には南北戦争後、そのメモリアルとして南部兵士像があちらこちらに建立されたのですが、一方でこれは黒人の人々にとっては戦前の奴隷制や黒人差別を象徴するものでもありました。この像が町には二つ、ミシシッピ大学の構内と町の中心にあるのですが、大学は大学内の像を撤去することに関して議論を始めていました。このグループは撤去に反対すべくオックスフォードに集結したのです。

この日は土曜日でしたが、大学ではバスケットのホーム試合が

実施される日でもありました。試合は予定通り行われましたが、試合開始前の国歌演奏の時、ミシシッピ大学の何人かの黒人選手が整列しながら床に膝をつきました。2016年に黒人に対する暴力行為に対してNFLのキャパニック選手が抗議を表すものとして国家演奏の間、膝をつき、それが大きな論争を引き越したことを覚えている人も多いかと思います。それ以来、黒人に対する暴力が起こると、このような抗議が見られるようになりました。もちろんミシシッピ大学の黒人学生の行動も、この行進に抗議を示すものでした。町や大学に大きな混乱はありませんでしたが、黒人学生の中にはその週末、危険を避けて大学から自宅に戻っていた学生もいたようです。これは、私に公民権運動はまだ終わってはいないということを改めて知らしめる出来事でした。

2019年は、アメリカの黒人文化・文学にとって(もちろん世界の文学にとっても)重大な出来事がありました。1998年に黒人作家として初めてノーベル賞を受賞したトニ・モリスン(Toni Morrison)が88歳で亡くなったのです。黒人女性作家としてモリスンは、奴隷制や差別の中で見えない存在として追いやられ、歴史の中で埋もれていた黒人、特に黒人女性たちを掘り起こし、その体験や感情に声を与え、文学作品という形で描き出しました。彼女の作品の中で一番の傑作と言われているのが1987年に出版された*Beloved*という長編小説です。これは、奴隷制時代、過酷な奴隷状況から娘と逃亡したものの、その途中、同じ悲劇を体験させないために娘を自ら殺してしまう黒人女性の物語です。モリスン自身はもちろん奴隷制を体験してはいませんが、その残酷な歴史と改めて向き合うことで生まれた作品です。

時代の流れの中で、社会は時にゆっくりと、時には劇的に変化します。しかし忘れてはならないのは、歴史に埋もれた人々の声、メインストリームの陰に声を奪われた人たちの声に耳を傾けることかと思います。モリスンの偉大さは、このような声を文学作品として見事に結実させた点にあると考えます。

参考文献

トニ・モリスン著、吉田廸子訳「ビラヴド」早川書房、2009

看護記録の電子化とその功罪ー坂の上の雲をめざしてー

看護学部 教授(看護管理学領域)
佐藤 ひとみ

イラスト
デザイン学部2年
中茂 裕貴

私はこの春、看護職として40年間勤務した大学病院を離れ、本学に着任いたしました。この40年間は、コンピュータが普及し、医療や医療記録が電子化された過程と一致します。間違いなく時代が変わりました。今回、「時代が変わるとき」というテーマをいただき、思い浮かぶことを書いてみました。

私の唯一の趣味は読書で、子どもの頃から濫読してまいりました。思い浮かぶ「時代が変わるとき」は明治です。中学生の頃に夢中になったのは、司馬遼太郎氏の「坂の上の雲」でした。「坂の上の雲」は、まだ江戸の気配が残る明治初期から日清・日露戦争へと続く物語で、主人公は陸軍騎兵隊創設者の秋山好古とロシアのパルチック艦隊に勝利した海軍名参謀の秋山真之の兄弟、真之の竹馬の友である正岡子規です。彼らは徳川から明治への「時代が変わるとき」に、なんとこのびやかにまっすぐに、「坂の上の雲」を仰ぐように日本の将来を考えていたことか。すっかりほれ込み、秋山兄弟が理想の男性像になりました。「坂の上の雲」に始まり、「戦艦武蔵」「戦艦大和ノ最期」「日本の一番長い日」「流れる星は生きている」「失敗の本質」等々、戦争に関する本を我ながらずいぶん読んだと思います。明治の若者たちが築いた日本軍が、なぜ太平洋戦争という愚かな戦をするのか、負け続ける現実を「勝ち戦」とごまかし、事実を正確に集めて適切に評価し判断するプロセスがどうして欠落したのか不思議でなりませんでした。

太平洋戦争で日本軍がたどった道は、組織論の「組織の衰退過程」に通じると思います。組織の衰退過程とは、

- ①組織の衰退の予見困難：意識されないまま、衰退に向かう変化が起きている
- ②怠惰の段階：大丈夫、様子を見ようといって見逃される
- ③誤った行動をとる段階：情報の途絶、組織から人心が離れる、集団浅慮が起きる
- ④危機の段階：まさしく危機的状態の発生
- ⑤解散の段階：最終的な組織の整理の段階 です。

むろん、戦闘の中にいた将兵たちは家族を守ること、国を救うことを願って戦っていたと思います。しかし日本軍という組織は、衰退に向かっていただのだと思います。

病院の話に戻ります。私が看護職として働いた期間は、医療や医療記録のコンピュータ化が進んだ過程と重なります。1995年に医療情報部という看護に直接関わらない部署で、私は看護師長になりました。この年はウィンドウズ95が発売され、コンピュータが身近に存在する今への「時代が変わるとき」であったと思います。コンピュータが業務用から個人用に、ユーザーインターフェイスがGUIに、コマンド入力からマウス操作の時代になりました。これは劇的な変化でした。

病院では、1980年代後半から医師の指示を検査部や薬剤部等の各部門に伝達するオーダーリングシステムが一般的になり、1990年後半に電子カルテが登場しました。看護の世界では、1995年に北海道大学病院で温度板を電子化し、看護記録の電子化が進みました。私はこの看護記録の電子化に直接携ってきました。ところが今は、看護記録を電子化して便利になる一方で、看護職の考える力、感じる力はどうなっていくのだろうと危機感を覚えています。「便利とおバカは背中合わせ」です。大事にしたいことや考える部分を意図的に残さないと、看護師の考える力はどんどん衰え、手足だけのおバカさんになるのではと心配です。人間は安きに流れる傾向があります。便利になると思考停止を招きがちです。目の前の患者さんを見ず、感じたり考えたりもせず、手元のワークシートだけを見るという状況は、自分が電子化に携わってきただけに、忸怩たる思いがします。今が、看護職が「おバカ」となる「時代が変わるとき」にならないよう、私たち看護職はこれからも「坂の上の雲」を見上げるように前を向き、賢くあらねばと願っています。

参考文献

司馬遼太郎「坂の上の雲」(1巻～6巻)文藝春秋社、1969～1972

テイクの世界からギブの世界へ

デザイン学部 准教授(人間空間デザインコース)
小林 重人

筆者紹介

システム論の観点から社会の仕組みや制度のデザインについて研究している。最近はトップダウンでつくられる制度ではなく、自分たちの暮らしのために自分たちでつくる仕組みやシステムを研究対象としている。専門はソーシャルデザイン、複雑系科学、進化経済学。博士(知識科学)。

イラスト
デザイン学部2年
松居 咲来



不思議な能力を持つ少女モモが、灰色の男によって町の人々から奪われた「時間」を取り戻そうとする物語『モモ』。「時間を銀行に預ければ利子をつけて時間を返す」という灰色の男たちの甘い誘いに乗せられて町の人々は自分たちの時間を貯蓄し始めます。ところが人々の暮らしはよくなるどころか、時間を貯蓄することに追い立てられて徐々に生きる気力を失っていきます。ドイツの児童文学作家であるミヒャエル・エンデが描いたこの作品の背景に「貨幣制度への疑問」があることを最初に見抜いたのはドイツの経済学者ヴェルナー・オンケンでした。エンデはオンケンとの書簡のやりとりの中で「貨幣の問題が解決されなければ、私たちの文化に関するすべての問題は解決されないことに気づきました」と答えています。では、エンデが伝えなかった貨幣の問題とはいかなるものだったのでしょうか。

私たちが生きる資本主義社会では「お金持ちになりたい」といった個人の利己心が経済を発展させる原動力であると言われています。実際に経済が発展することで、人々の所得が増えて自分たちが欲しいものを購入できるようになりました。そのため、経済が右肩上がりの時代にはGDPを上げることが国民の豊かさを表す重要なバロメータでした。しかし、世界的な低成長の現在において、GDPを上げることが果たして私たちの豊かさを高めることに直結していると言えるでしょうか。先進国でも貧富の格差は拡大を続け、日本でも7人に1人の子どもが貧困状態にあると言われています。拡大する格差を目の当たりにする中で、果てしない経済成長を追求し続ける資本主義社会の限界に気づいている人たちも少なくありません。実はエンデもそのようなひとりでした。彼は人々が貨幣を交換のための手段ではなく、貨幣そのものの所有を目的としていることに問題があると感じていました。もちろん資本主義社会ではお金儲けをすることが認められていますので、社会のルールとしては何の問題ありません。ですが、そこには町の人々が時間を貯蓄することに取り憑かれたように、私たちもまた生活を豊かにするはずの貨幣制度にいつの間にか取り込まれて貨幣を渴望するだけの無為な生活を過ごしているようにも見えます。

国分寺市にある「クルマドコーヒー」のオーナーである影山知明さんは、いまという時代は時間と闘ってしまっていると述べ

ています。いかにして効率的に利益を上げていくのか、そのようなことを突き詰めていくと時間をかけて仕事をするとは「悪」となります。そこではお客さんは利益を上げるための「手段」となり、相手に利用価値があるかどうかで付き合いを判断するような人間関係が広がっていきます。そこで影山さんは人間関係を「テイク(もらう)」から始めるのではなく「ギブ(贈る)」から始めることを提唱しています。自分が相手にギブをすることで、その行為を相手が覚えていれば、いつか思いがけないお返しがやってくるかもしれません。将来的にそんなことが起こると想像するならば、相手のために手間ひまかけて日々を過ごすことも楽しくなると言うのです。こうした考え方はまったく新しいものではなく、古くから「恩送り」や「情けは人の為ならず」といった表現で実践されてきました。対価以上のことを先んじて相手に贈ることでお金のために働くことをやめてみる。そうすることで仕事の内実や人間関係も変わり、結果として経済的にも人間的にも豊かに暮らしていくことができるのかもしれません。

モモは、時間をつかさどるマイスター・ホラに尋ねます。「時間どろぼうが人間から時間をこれ以上盗まれないようにすることだって、わけもないことでしょう?」それに対してマイスター・ホラはこう答えます。「いや、それはできないのだ。人間は自分の時間をどうするかは、自分で決めなくてはならないからだ。だから時間を盗まれないように守ることだって、自分でやらなくてはいけない」

私たちに与えられた時間をどのように使うのかは、社会の仕組みに左右されることなく自分自身で決めることができるはずです。なぜなら社会の仕組みをつくっているのは人間自身なのでから。

参考文献

ミヒャエル・エンデ、大島かおり訳『モモ』岩波文庫、1976
ヴェルナー・オンケン、宮坂英一訳『経済学者のための『モモ』入門』『自由経済研究』第14号、pp.7-25、1999
影山知明『ゆっくり、いそげ』大和書房、2015

ネガティブ・ケイパビリティを味方につける

看護学部 教授(母性看護学領域)・助産学専攻科長
荒木 奈緒

筆者紹介

札幌出身、助産師。2019年4月より現職。胎児に病気があることが判った妊婦さんの支援や、遺伝性疾患を持つ人々の症状や生活の支援に関して研究を行っています。



イラスト
デザイン学部2年
松居 咲来

COVID-19の感染拡大によって、私たちの生活様式は一変し、様々な自粛・我慢を強いられるようになりました。「コミュニケーションをとってなんぼ!」の看護ケアにおいて、ソーシャルディスタンスで患者さんの手を握って励ますことが憚られる、マスクで顔の半分が隠れた中で患者さんの細かな表情を読むのに苦慮する、フェイスシールドの乱反射で患者さんと目が合わない中で雑談をするといったことが日々普通のことになってしまうとは、露ほども考えたことがありませんでした。職場においても、同僚の送別会・歓迎会が頓挫し、会食はご法度となり、「親交を深める」「同じ釜の飯を食う」「酌み交わす」といった言葉は死語のようにも感じられます。COVID-19の特性から、今後、私たちの生活が基に戻ることを容易に想像することはできず、時代が変わってしまったことに愕然とするばかりです。

ダイヤモンド・プリンセス号における感染者報告がなされた頃、できるだけ早く感染者を見つけて隔離・治療を行えば、快刀乱麻のごとく解決を図ることが、日本の医学・医療では可能であろうと淡い期待を持っていたのは私だけではないでしょう。しかし、それは大きく裏切られ、なすすべもなく感染が拡大していき、北海道ではいち早く緊急事態宣言が発令される事態となりました。原因がわからない、対策もわからない、感染すると致命的となるといった情報から、「何とかしなければ」とジタバタし、何かや誰かを責めたい気持ちとなり、言いようもない不安に襲われたのは正直なところ。

そんな時、ある本によって「ネガティブ・ケイパビリティ」という言葉と出会いました。

ネガティブ・ケイパビリティ(negative capability)とは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処のしようのない事態に耐える能力」をさします。あるいは、「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にいることができる能力」を意味します。

これまでに私が学んできた医学・保健医療学において求められてきた能力は、患者さんや対象者に起こっている問題や課題

をできるだけ早く同定し、その原因を分析し、具体的方策を設定して、いち早く、もしくは目標期限までに解決・達成することでした。この信念から見ると、ネガティブ・ケイパビリティとは「能力」ではなく、「逃避」なのではないかと懐疑の念を抱きながらこの本を手に取りました。

この本では、ネガティブ・ケイパビリティについて、教育や医療の現場、文学の世界から具体的な例示をもとに説明がなされていました。読み進めるうちに、これまでに関わった患者さんのお顔と共に「治らない」「解決できない」場面で答えを見出せずに踞^{よみがえ}っていた当時の私の気持ちが蘇りました。

しかし、すぐに解決ができなくても持ち堪えていくことも能力であることをこの本から知り、その当時の患者さん達の穏やかさがネガティブ・ケイパビリティであったことに改めて気づかされました。加えて、COVID-19について私が感じた不安の正体が、私自身のネガティブ・ケイパビリティの欠如によるものだ気づき、納得するとともに気持ちが楽になる経験をしました。

昭和歌謡の歌姫、中島みゆきさんの“あんな時代もあったねと、いつか笑って話せるわ。だから今日はよくよしないで、今日の風に吹かれましよう。”という歌を皆さんは聴いたことがあるでしょうか。この歌詞はネガティブ・ケイパビリティを味方につけた姿をまさしく描写しています。

時代が変わるとき、痛みを伴うことやどうしたらよいのか判らない事態に巻き込まれることが往々にしてあります。それでも、答えのない事態に耐える力を味方につけて、ニューノーマルのこの時代を撓^{しな}やかに生きていきたいものです。

参考文献

篠木蓮生「ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力」朝日新聞出版、2017
桑園一般図書 493.72/Hah
中島みゆき作詞「時代」、1975

自分の“メガネ”を作り出せ ～例えば意味の共有、ただの偶然、変化の本質～

デザイン学部 准教授(共通教育)
丸山 洋平

筆者紹介

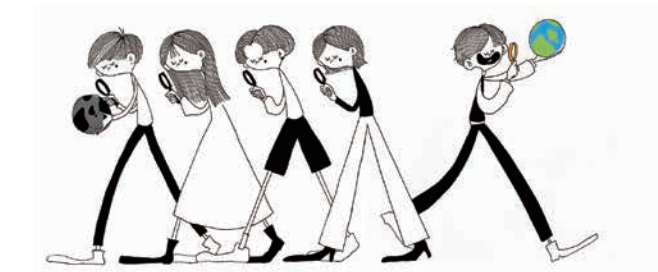
共通教育担当。

1983年に岐阜で生まれ、すぐに東京郊外へ引っ越して30年ほど暮らし、その後福井を経て札幌在住3年目です。専門は地域人口学、人口・家族研究で、それらを通じた政策研究もやっています。2020年は国勢調査の実施年ということもあって、NHKラジオの全国放送に出演する機会がありました。その時に提出した書類には「氏名(芸名・筆名)」とあって、ちょっとした驚き。何でも経験してみるものです。

「世相にシンクロしちゃいけない」。アニメ演出家である富野由悠季さんへのインタビューがWeb記事になっていて印象に残った言葉であるが、今回の特集テーマである「時代が変わるとき」にも親和性があるように思われた。私たちが認識する時代の変化や社会の変化というものは、実は自分で判断したのではなく、膨大な情報にさらされて世相にシンクロしてしまった結果の産物なのかもしれない。私自身、人口や家族の問題を通して現代社会を研究している身であるから、実際に社会は変化していると思う。それでも変化というものをもう少し冷静に、世相にシンクロせずと考えられないだろうか。そんな思考に役立ちそうな視点を私の読書経験から3つほど示してみたい。

『〈意味づけ論〉の展開』では、「刑務所はどんな場所か?」という質問に対し、ホームレスが「暖かいご飯を食べさせてくれる場所」と答える事例が紹介される。恐らく多くの人が「犯罪者を拘束する施設」のように考えるだろうが、同じコトバでも皆が同じものを想像しているとは限らない。例えば人口減少というコトバからイメージするものや人口減少に伴う社会の変化としてイメージするものは、置かれている状況や人生経験などを踏まえて、人によって異なっているだろう。果たして人口減少というコトバは何を意味し、どのように共有されているのだろうか。

変化に見えるものは、実は変化すらしていないかもしれない。毎年公表される人口統計は、1年の変化でもその原因が語られる。「出生率が前年よりも上昇した。これは本市の子育て支援施策が効果を発揮したからだ」といった具合である。本当にそうだろうか。『たまたま 日常に潜む「偶然」を科学する』は、なぜヒトは「偶然(たまたま)」を「必然(やっぱり)」と勘違いしてしまうのか、という問いを私たちに投げかける。一定の確率によって物事が生起するならば、本質的な変化が起こっていなくても(生起確率が変わってなくても)少々の数値上の変化は偶然の範囲で観測されてしまう。出生率がわずかに上昇したからといって、施策の効果が表れたとは限らないのである。しかし、行政組織の宿命が「たまたまです」とは言わないし、そういった回答をメディアは求めている。一見して変化と思われるものは、偶然ではないといえるのだろうか。変化に対する私たちの認識の仕方は適切なのだろうか。私たちは変化に対して

イラスト
デザイン学部2年
江本 千尋

理由を求めすぎているのかもしれない。

女性の社会進出に伴う変化に対する視点を『21世紀家族へ』は提供してくれる。同書は「女はなぜ主婦なのか」の答えを見出そうとした著者の研究努力がまとめられており、家族とは変化するものであって、「女性は皆結婚して専業主婦となる家族」は歴史的变化の中に出現した家族の一形態に過ぎないことが明らかにされる。しかし、女性が専業主婦であることを前提とした社会の仕組みが作り出され、その後の変化を想定しなかったために、徐々に進んで蓄積される女性の社会進出という変化があるタイミングで閾値を超え、大きな葛藤が突然生じたかのように錯覚することになった。国民年金の第3号被保険者問題などは、そういった状況のわかりやすい事例であろう。目に見える大きな変化とは、何かが限界を超えて顕在化しただけに過ぎず、その背後で進んできた小さな変化の方が本質的な変化であるかもしれない。果たして女性の社会進出による変化とは何を指しているのだろうか。

社会の変化として認識するものは人によって異なるだろうし、異なっていてよいと思う。それだけに自分の目で変化を捉えることの重要性は増してきており、そうした姿勢や態度は未来を生き抜く術になっていくのだろうと思う。何から始めたらいいかわからないということなら、書籍に記された先人の知恵を借りよう。それらを読んで身に着けたアイデアを駆使すれば、社会を見るためのオリジナルの“メガネ”を作り出せる。そしてその“メガネ”があれば、世相にシンクロせずとも変化の本質を自分の力で判断できるようになるはずだ。

参考文献

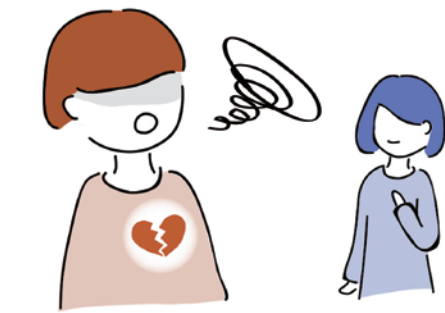
レナード・ムロディナウ「たまたま 日常に潜む「偶然」を科学する」ダイヤモンド社、2009

芸術の森 2F 一般図書 417.1/Mlo

落合恵美子「21世紀家族へ」(第4版)有斐閣、2019

芸術の森 2F 一般図書、桑園 一般図書 367.3/Och

当事者研究と精神医療の時代

看護学部 講師(精神看護学領域)
伊東 健太郎イラスト
デザイン学部2年
山田 実来

精神科医療の背景

精神障害を抱える当事者(以下、当事者)の症状は、統合失調症の当事者の例を挙げると、「死ね」、「殺すぞ」などと、否定的な声が聞こえる幻聴や、「私を殺そうと狙っている」、「宇宙人が攻撃してくる」と感じる妄想がある。当事者だけが経験する、非常に恐ろしい世界は、誰にも相談できず自分だけで抱え、日々怯えて過ごすことが多い。

入院が中心となる精神医療の時代には、この独特の世界を当事者が表明すると、入院が中心となる精神医療の時代には、相互理解が困難な病理としてみなされ、精神科での治療対象となり、長期の入院を余儀なくされた。

時代が変わり、近年の精神医療では、脱施設化が求められ、入院中心から、地域中心の医療へと移行している。そのため、当事者は、自分自身の苦勞や、症状の意味について考え、共有できるようになった。この取り組みは、地域住民の当事者への理解を進め、協働できるまでになった。

この当事者の自己理解と対処方法、情報共有を行うにあたり用いられたツールの一つとして「当事者研究」がある。

当事者研究の概要

当事者研究は、2001年に、北海道の浦河町にある精神障害者の活動拠点「べてるの家」から始まった。

統合失調症の若者が、入院中に破壊行為と他害行為を繰り返していたため、対応に苦慮したソーシャルワーカー(私も大変苦勞した)が、その若者に「自分の病気について研究しよう」と持ち掛けたことが始まりである。その後、「べてるの家」が主催した「べてる祭り」の余興で「爆発の研究」として、初めて、当事者研究として紹介された。これを契機として、当事者研究は、急速に広がりを見せた。現在、国内はもとより海外でも行われている。

当事者研究は、「研究は専門家がするもの」という前提を覆し、当事者自身が、「自らの研究者」として研究を行う。当事者自身の体験を「情報公開」することで、「苦勞の主人公」となり、病気のつらさや、苦勞、生きづらさ、成功体験を仲間と一緒に話し合い、共感や共鳴を得る。また、自分らしいユニークな発想で、仲間と一緒に、「自分自身の理解」を深め「自分の苦勞」について探求する。そして、「自分の助け方、励まし方」を見つけていく。

特にユニークなのが、オリジナルの「自己病名」をつけることで、医学的な病名ではなく、自分の病気や苦勞を仲間が理解しやすくするために「病名」を自分でつけるのである。

当事者研究の事例

当事者研究の事例を紹介する。

統合失調症のAさんが、仲間と楽しく過ごしているときに、「睨まれている」と感じたため(実際には、睨んではない)、そのように感じる原因解明のために研究を行った。

その結果、「空腹」という身体状態が視覚に影響していたことが判明した。Aさんは、空腹時には、仲間の笑顔を素直に認識できず、睨まれているように感じていた。その研究結果を踏まえ、Aさんは、空腹を満たしてから仲間と過ごすようにしたところ、「仲間に睨まれる」症状は出現しなくなった。

統合失調症のBさんは、否定的な認知や幻聴により、仲間へ何度も確認を「くどく」する症状に悩んでおり、「くどさ」のメカニズムを解明するため、研究を行った。その結果、くどさを無くすのではなく、「くどくてもいいや」と、自分を認め、「幻聴に対処法を相談する」ことで、症状が落ちつくことが判明した。その後、Bさんの「くどさ」の症状出現は少なくなった。

当事者研究と時代の潮流

精神医療は、地域中心の時代となった。当事者は、当事者研究により「苦勞の過程を仲間と共有すること」や、理解されない病気の苦勞を「自分の体験を他者にわかりやすく言語化すること」が可能となった。それを契機として、当事者は、講演会や、書籍などを通じて、自分の経験を公開する機会が増えた。

これらの取り組みは、地域の人々が当事者に対して理解を深め、当事者の苦勞や、対処方法などについて一緒に考え、協働できるきっかけとなったため、当事者は、地域の中で、尊厳を持ち当たり前に生活できるようになった。

今後の精神医療の在り方として、医療従事者が、治療方法を考えて当事者の回復や課題解決をする方法から、当事者が自分自身の症状や、回復する方法の研究を行い、当事者と医療従事者が協力して、治療方法を検討する時代になるだろう。

参考文献

浦河べてるの家「べてるの家の『当事者研究』」医学書院、2005

芸術の森 2F 一般図書 369.28/Ura

石原 孝二「当事者研究の研究」医学書院、2013

桑園 一般図書 493.72/Ish

群れることへの欲求

デザイン学部 教授(共通教育)
町田 佳世子

筆者紹介

専門はコミュニケーション学。コミュニケーションで行き違いが起こるのはなぜかについて、交わされた言葉の意味は発信者の送り手ではなくそれを受け取った受け手の解釈で決まることを前提として、会話分析やテキスト分析手法を用いて研究している。



イラスト
デザイン学部2年
山田 実来

時代は常に変化している。しかしの中で決して変わらぬものもある。2017年に芸術の森キャンパスライブラリの小さな情報誌「ほんわか」で紹介した、サイモン・シン著の「フェルマーの最終定理」は私の好きな本の1つであるが、そこには、17世紀にピエール・ド・フェルマーによって提示された数学界最大の難問が20世紀にアンドリュー・ワイルズによって証明されるまでの多くの数学者達の挑戦が描かれている。定理証明までの300年を超える時間の流れの中で、時代も社会も科学も大きく変化した。しかし決して変わることがなかったのは彼らの数論への情熱と挑戦である。また、生物学者の福岡伸一氏は、ある雑誌のエッセイで、自然界における大きな発見は、アマチュアの人達が生涯持ち続けた情熱によって牽引されてきたと述べている。それらを読むと、時代の変化に翻弄されることのない、人間の普遍的欲求に心動かされる。

2020年、社会は大きく変わった。身近で大きな変化の1つは働き方だろう。これまでは、職場まで通勤し、時間・空間を人々と共有しながら仕事をするのが当たり前であった。それが一気に変わり、在宅での仕事 that 当たり前、かつ可能となった。このような働き方が社会の中で定着すれば、従来の働き方では社会参加できなかった人たちも働くことが可能になり、新たな能力や発想が投入されていくことも夢ではない。もしそうならば、2020年がもたらした時代の前向きな変化と言えるだろう。

しかし、突然1人1人が在宅勤務になっても仕事が遂行されているのは、それまで皆が場を共有し顔を合わせながら仕事をしてきたことが土台にあるからではないだろうか。お互いの人間性や能力やくせや微妙な感情の動きを何となく把握していたから、この人にはここまで説明すれば分かってくれる、あの人のメールの素っ気なさは怒っているからではない、などがある程度わかる。顔を合わせていたからこそ、文字や声だけのやりとりになっても何とかが支障なく遂行していけるのである。

外出が制限され、友人達とも思うように会えなくなった毎日の中で生まれてきたのが、オンラインで集う、という群れ方である。それも対戦ゲームやSNSによる双方向ではなく、リアルタイムに顔を見せて集うのである。皆が画面の一面に正面を向

いて映っているオンライン画面は、ある意味奇妙な空間である。私達が同じ場に集うときは、左右や斜めに人がいて視線が複雑に行き交う。時に発話を重ねて親しさと賛同を示し、耳元で小声でささやき、目配せをし、表情以外の動作に注目する。でもオンライン画面はまだそれはできない。ちょっと相手の腕に手を置くことも、何かを指さすこともできない。これまで当たり前だったコミュニケーションの道具が使えないので、それを補おうと表情を豊かにしたり、チャットをしたり、拍手やいいねのマークを使う。それは少し物足りないし少し疲れる。それでも私達は集うことによって、顔を見て安心したり、関係を確かめたいから、今使える方法で群れようとするのだと思う。

有名なヤマアラシの逸話は人間のコミュニケーションにも当てはまる。私達は1人でいると淋しいから誰かと交わりたくなる、でも交わると煩わしいこともでてくるので、また1人になりたくなる。そして1人になると淋しいから、煩わしくてもまた交わってしまう。そのくり返しである。群れるからこそ1人になる意味があり、1人になるからこそ群れることへの欲求が生まれる。1人でいることを強要されればされるほど、私達は群れて自分の存在や仲間との関係を確かめたいのである。その気持ちは、フェルマーの最終定理証明や新種の発見に挑戦し続ける情熱と同様、時代の変化とは無縁の、人間の不変の欲求だろう。変わっていくのは群れるための手段であり、その手段も、私達が当たり前と思ってきた時間と場所を共有する群れ方に限りなく近いものが生まれてくる予感がする。今の科学・情報技術は今まで見たこともないような新しいもので時代を切り開いていくだけでなく、人間が人間として存在してからずっと行ってきた集い方が実現できる方法、つまり不易でありながら未来的な方法を示してくれるに違いない。

参考文献

サイモン・シン、青木薫訳「フェルマーの最終定理」新潮社、2006

変化を恐れないー新しい世界を作るのは皆さんです

看護学部 准教授(基礎看護学領域)
大野 夏代

イラスト
デザイン学部2年
森宗 優香

筆者紹介

JICAより派遣され、内戦中のスリランカで4年半の勤務を行った。地球規模で健康を考える看護師の育成に尽力。助産師でもある。3人の子供をそれぞれ別の国で出産するなど、医療や教育など社会資源の消費者としての世界での経験が自慢。

新型コロナウイルスの流行により、これまで普通だと思っていた多くの社会現象が大きく変化しました。あんなにたくさんいた外国人観光客が「蒸発」したことも、そのひとつだと思います。外国人が日本に来て観光することを、「インバウンド」というのはご存知ですね。それに対し「アウトバウンド」とは「中から外に出る」という意味で、観光業界で使われる時は、海外旅行をする日本人、もしくは海外旅行そのものを指す言葉です。

医療にもインバウンドがあります。「メディカルツーリズム」という言葉は聞いたことがあるでしょうか。自国では得られない医療を受けるため、あるいは、満足できる結果を希望の価格で得るため、患者さんが国境を越えて移動し日本で受ける医療サービスを、インバウンド医療といいます。メディカルツーリズムは成長市場のひとつとされており、日本国政府は2011年に医療滞在査証を創設しました。日本のどの病院でも利用できる制度ですので、看護学部の皆さんが看護師になったときに、治療のためにわざわざ外国から渡航する患者さんのお世話をするかもしれません。

では、医療のアウトバウンドとはなんでしょうか。今回紹介する、「病院がトヨタを超える日」は、日本の医療サービスを海外展開(アウトバウンド)している北原病院グループの話です。

北原病院グループは、2016年、カンボジアで、Sunrise Japan Hospital, Phnom Penh を開院しました。診療報酬制度はありませんし、寄付で成り立つ病院ではありませんので、存続可能な経営をしなくてははいけません。慎重な現地調査の結果、検査や治療を厳選しICTを積極的に導入することにより、日本と同じ水準の医療を日本と同等な価格で提供できれば、お金持ちだけではなく現地の普通の人たちに選ばれ経営が成り立つと判断したのです。その背景には、過去の内戦のために遅れた医療と経済発展との不均衡があります。自国の医療を信用しないカンボジアの人たちが、風邪などの治療のために、タイやシンガポールなどの近隣諸国に日常的に受診に行くという現状があり、その人数は年間数十万人ともいわれます。Sunrise Japan Hospital, Phnom Penh は、これらの人たちがカンボジア国内で安心して受けられる医療を提供するという「医療の地産地消」を目指しています。また、カンボジア人医療者を育

成し国全体の医療レベルを上げることも目的としており、まさに国際協力を実践しています。

今回、ご紹介した考え方は、多くの皆さんにとっては新奇的に感じられたと思います。「医療を輸出する」という考え方に、私も初めは新鮮さを感じました。しかし、実は、「医療の輸出」は、日本国政府の成長戦略の一つです。日本の高い技術が世界で十分には使われていないというのは、実にもったいないことです。

ICTの進展は、目の前の課題に解決の方向を示す可能性があります。例えば、私は、在日外国人の患者さんの問診における言葉の壁(看護師の外国語能力)に悩んでいたのですが、北原病院グループでは、「問診」は自動問診システムにより多言語で行っており、高品質な情報収集ができています。

一般的には海外展開は世界の常識であると言えます。例えば自動車産業が、もし国内で日本人向けにだけ自動車を製造していたら世界に誇る産業にはなっていないと思います。世界有数の長寿国である日本は、医療サービスを海外でも実践することにより、現地で人々の幸せを増やすことに貢献できそうです。

新型コロナウイルスの影響による社会の変化は、まだ止まらないように思います。変化する毎日に疲弊せず、「専門職業人として本当にするべきことは何か」という視点で意図的に目の前の事象を見て、よりよい社会づくりのために行動することができたら、それは本当に素晴らしい事だと思います。皆さんの活躍に期待しています。

参考文献

北原茂美「『病院』がトヨタを超える日 医療は日本を救う輸出産業になる！」講談社、2011

身近なものにもう一度、目を向けてみよう

デザイン学部 教授(人間空間デザインコース)
椎野 亜紀夫

筆者紹介

神奈川県出身、2003年から北海道在住。専門は都市緑地の調査・研究であるが、市街地のすぐ近くに野生生物が生息する北海道の自然に感動し、地域の人たちとこどもの自然観察ボランティアに参加。2017年より札幌市立大学に着任。時間があれば大学敷地内の森に入り、野草や野生生物を観察する。四季折々に変化する芸術の森キャンパスの自然を、多くの学生に知ってもらいたいと思う日々。



モンタナマツの球果(上)とエゾリスの食痕(下)

「森のエビフライ」をご存じだろうか。マツ類の種子は球果、いわゆる「まつぼっくり」の堅い鱗片に包まれており、種子は動物たちの食料になる。エゾリスはまつぼっくりの鱗片をかじって種子を取り出し食料とするが、先端部分を残して鱗片をはがされた球果(食痕という)の姿はエビフライにそっくりである。秋から冬にかけて、自然に囲まれた芸術の森ではエビフライを拾うことができる。見つけたときの喜びもさることながら、それを手に取った動物の存在をも身近に感じることができる。知識は人をして、何気ない日常に喜びをもたらす。

新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大は、わたしたちの日常生活のみならず健康や命をおびやかす深刻な状況をもたらした。社会生活では経済活動の停滞・縮小化を余儀なくされ、家庭生活ではこれまでにない外出制限、行動制限を強いられる日々が続いている。そのような中であって、身近にあるものに改めて目を向けてみてはどうか。何気ないものにこれまで気づけなかった価値を再発見するかもしれない。

「三銃士」で有名な文豪アレクサンドル・デュマの著作に「モンテ・クリスト伯」がある。主人公のエドモン・ダンテスは、無実の罪で孤島の監獄に送られ人生に絶望するが、獄中で出会った聡明な哲学者ファリア司祭との出会いに救われる。作品の中で次のような二人のやりとりがある。

『・・・まず、こんなことを考えました。それは、こうした目的にお達しになるまで、あなたがどれほど頭をおしぼりになった

イラスト
デザイン学部2年
中茂 裕貴

だろうということでした。もし自由の身でおいでだったら、どんなことをおやりになれたでしょう?」

『なにもできなかったことだろうよ。このはち切れそうな頭にしても、おそらくくだらないことのために発散してしまったことだろう。人智のなかにかくれている不思議な脈脈を掘るためには、不幸というものが必要なのだ。火薬を爆発させるには圧力がある。監獄生活というやつは、ほうぼうに散らばっていたわしの才能を一つの点に集めてくれた。才能は、狭い領域でぶつかり合った。そして、御存じのことと思うが、雲がぶつかりと電気ができる。電気からは火花が出る。火花からは光が出る。・・・』

日常に制約の多い状況であるからこそ、自らの創意工夫で新しい価値を見いだす前向きな気持ちを大切にしたい。

参考文献

アレクサンドル・デュマ「モンテ・クリスト伯」(1)岩波書店、1956
芸術の森 1F 文庫新書 080/lwa/赤533-1

人と会えなくなった「今」だから気づいたこと

札幌市立大学 看護学部 2年
古舘 樹イラスト
デザイン学部2年
森宗 優香

私は、人に会えないことがこんなにも辛いことだなんて知らなかった。

例年より少し長い春期休業を経て、遠隔という形で5月中旬に授業が開始した。2年生へ進級した実感がないまま遠隔授業が始まった頃は、久しぶりの授業からの疲労と学べる機会が戻ってきた喜びを感じていた。しかし、1ヶ月ほどでその疲労感はひどくなり、学びへの喜びはいつの間にか消えていった。友人と共に同じ空間で学べないことで自分が今どこに居て、どこに向かっているのか、そして、なぜ看護を学んでいるのかということが分からなくなっていたからだ。

後期の遠隔授業が開始しても、状況は何も変わらない。唯一変わったのは、家の通信環境を良くするために新しいWi-Fiを購入したことくらいである。家から出ずに毎日パソコンに向かって、社会から切り離されたような孤独を感じながら、時間だけが進んでいるような気持ちで過ごしていた。そんな時、本を紹介する機会をいただいた。これは自分を見つめ直す時間になると考えて、本棚にあった本書を読み直すことにした。

本書に初めて出会ったのは、高校1年生の夏。祖母と地元の図書館に涼みに出かけたときのことだった。本を探している時におすすめコーナーにあった本書を手にした。その頃の私は、「人の死って悲しいだけじゃないんだ」と死に対する新たな捉え方を本書にもらった。何度か読み返すうちにその時の自分の心情によって感じるものが異なり、人間の最期の在り方を自分なりに考えるようになった。あの頃は看護の知識なんてこれっぽちもなかったが、看護を学び始めて2年目の今、本書から受け取れることが増えたような気がする。

著者は、死を看取るということを仕事にしている臨床医である。また、鳥取市内でホスピスケアを行う有床診療所を開設し、地域医療へ貢献した方だ。そんな著者の優しく語りかけるような綴り方から、死に向かう人やその家族に寄り添って、温かく包み込んでくれる寛大な心をもつ方だと想像できる。そして、私は描かれている看取りの場面を思い浮かべて死に向かう人の心に寄り添ってみる。すると、私もその人を看取ったような気持ちになり胸の奥が苦しくなって、涙がこぼれる。本書には著者が立ちあった83のお別れとその人が生きた証が描かれ

ていて、看取るとは何かということを考えさせられるのだ。今の私が本書を再読して思ったこと、それは、看取りの臨床で働くということは、悲惨な死、虚しい死、どこか褒め称えたいような死、誇らしくなる死など、他人の死を通して様々な死と向き合うことかなということだ。

私にとって死とは、いつかは誰にでも訪れるもの、でも自分の中にはなくて他人の中にある、もしくはずっと先にあるものだ。そんな死が訪れたら、その瞬間は1人では迎えたくないなと強く思う。私の最期を誰かに看取ってほしいと思う。それから、欲を言えばその人に「ああ、素敵な人生だったよ。」などと言われたと思う。

こうやっていつの間にか、本書を通して著者の出会った人に私自身も出会った気になり、「私だったら…」と思考を巡らせ、何らかの形で自分に結びつけようとしていた。

私は、人に会えなくなって、このような機会をいただいて気づいたことがある。それは、無意識のうちに他人と自分を比較して、自分がどうあるべきなのか探りながら生きていたのだということだ。だから、人に会えなくなって自分を見失っていたのだと分かった。そして、そこまで他人に影響を受けていたと考えると自分は他人に関わることで作られているのではないかと思った。でも、それは当たり前のことなのではないかと感じている。なぜなら、今までの人生で物事が自分だけで完結することはなく、必ず誰かが関与していた気がするからだ。きっとこれから最期の時までそうだろう。

今も遠隔授業が続く、人と会えない状況は変わっていない。苦しいけれど今はぐっとこらえて、本の中の人物や画面に映る人の思考や心に触れてみるのもいいかもしれない。そして、自分がどうあるべきか探り、自分をどう磨けばよいかのヒントを得る。次誰かに直接会えた時、その人の目に少しでも成長した自分が映っているように今を一生懸命もがきたいと思う。

参考文献

徳永進「わたしだって看取れる」KKベストセラーズ、2013

本が気づかせてくれること

札幌市立大学 デザイン学部 3年
畠中 彩

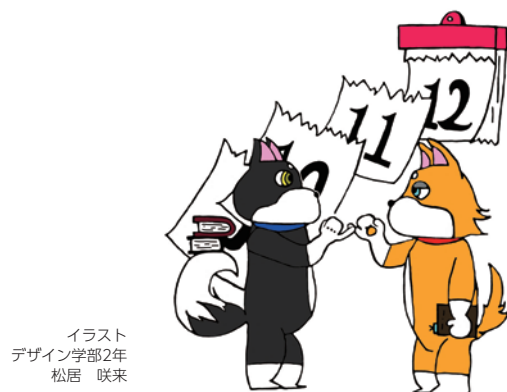


イラスト
デザイン学部2年
松居 咲来

私はつい本を買ってしまう。まだ読んでいない本や、読みかけの本、本を読む前にやらなければならないことが残っているのにも関わらず、つい手を伸ばしてしまうときがある。それは、本が知識を与え、非日常を見せ、そして日常の中に隠れている大事なことを教えてくれる、そんな豊かな時間を与えてくれるからだ。小さな頃に読んだ絵本は字や色、身近なものを教えてくれたし、小学生の頃によく図書館で借りた伝記からは歴史や外国の文化を学んだ。中学、高校時代は小説を好んで読むようになり、自分の経験したことのない世界を知ったし、大学生になると専門的なものや写真集など、より幅広い本を手にとるようになり、様々な情報をもらい、まだまだ知らなかった世界を知り、気づきを与えてもらった。特に、最近読んだ本からは、日常を過ごしているだけでは気付けなかった、当たり前だけれど大切なことを気づかせてらったので、ここではそのことについて書いていく。

その本は「今日も君は、約束の旅に出る」という単行本で、女優になるという夢を諦めかけている国木アオと、その幼馴染で、約束を果たす時が来るとその場に瞬間移動する体質になってしまったという森久太郎が再会することから始まる物語で、ファンタジー要素を含んだ恋愛小説らしかった。らしかったというのは、恋愛に特化したものというより、約束を交わした人と人の関わり合いが丁寧に描かれている印象で、もっと大きくて深い、人間ドラマ的な要素が強かったように思われるからである。伏線回収が綺麗にされており、物語としても十分楽しめたが、約束というものについても深く考えさせられる作品だった。

人は日々、人との会話の中で何気無く約束を交わす。そういえば私は昨日も人と約束を交わしている。しかし、その約束は守られないかもしれないと思っている。そういう思いがどこかにあるのに約束をする。それが日常になっているし、時には守る気のない約束をしてしまうこともある。約束が果たされないうまま、約束をした人同士の記憶の中から消えてしまうこともあるし、一方が覚えていたとしても、もう一方が覚えていなかったり、忘れられてしまったのにも関わらずそれが咎めるべきことではないように扱われることもある。約束がどうい

かと問われれば、守るべきもの、破ってはいけないものであるはずなのに、時に人は約束を軽視する。もし私が久太郎のように約束を必ず守る体質だったら。そう考えると、私がこれまでどれだけ約束を軽視してしまっていたのかが気づかされた。

2020年は新型コロナウイルスの影響で世界が一変し、様々な約束が果たされなくなってしまった年だった。お盆やお正月にまた来年と言いつけていたけれど、感染拡大防止のために帰省を控えざるを得ないという話はよく聞かし、2020年の東京オリンピックは延期になり、1年遅らせて2021年になったとしても開催できるのか、という状況だ。私自身、友人と約束していた旅行はキャンセルになり、見に行く約束をしていた野球の開幕戦は無観客で始まってしまった。そんな時、とりあえず本を読んでみよう、何かを学ぼう、家の中にこもるつまらない日常を離れて、非日常に連れて行ってもらおうと読んだ本の中にこの作品があった。作中に、「別れる前に、なんでもいいから約束をしなさい。そうすればいつまでも繋がっていられるから」という言葉がある。今は先行きが不安な状態で、確証を持ってないため何かを約束するのも難しく、人と会うのも憚られる状況だ。けれど、こんな状況だからこそ、人と約束を交わしながら持つことで、希望にしていけることができるのではないだろうか。「約束のない人生なんて寂しい」。

参考文献

瀬名和章「今日も君は、約束の旅に出る」講談社文庫、2019

図書館サービスが変わるとき

芸術の森キャンパス・ライブラリー司書
鈴木 沙里

新型コロナウイルス感染症を防止しながらも、図書館サービスを可能な限り実施するにはどのようなことができるだろうか。これが2020年4月に図書館に司書として配属になり、関係者皆で最初に取り組んだことだ。多くの人たちが職種や立場は違えど、同じような状況だったであろう。

この札幌市立大学の図書館(芸森・桑園キャンパス)では、ウイルス対策や他大学図書館の動向など集めた情報を元に話し合い、学内の段階的な対応に合わせて図書館のサービスも決定した。その際、学内者を優先に考え、授業や研究を可能な限りサポートできるよう心掛けた。予防のためやむなく縮小したこと、その代わりに新しく始めたことや予防措置を以下のとおり簡単にまとめた。

縮小したこと

- 開館時間の縮小(平日9:00～17:00開館のみ)
- 館内利用時間の制限(1回30分程度)
- 同時利用人数の制限(上限15人)
- 館内利用座席数の縮小
- 館内視聴覚機器の使用禁止
- 館内PC端末使用禁止(蔵書検索機は稼働)
- 学外者利用不可

新しく始めたこと

- 学生への文献複写・図書の郵送サービス(費用図書館負担)
- 学生へのカウンターでの図書受渡サービス(予約制)
- 学生への図書長期貸出(授業の状況に合わせて)
- 返却ボックス常時稼働(以前は閉館時のみ)

感染予防措置

- マスク着用(司書・利用者)
- 手指用消毒液設置
- 返却図書消毒
- 館内共有機器等の消毒
- 飛沫感染防止シートの設置(カウンター)
- 館内の換気
- 自動貸出機の利用促進



芸森：カウンター飛沫防止シート



桑園：カウンター飛沫防止シート

このような状況で図書館を開館してみると、現在のところ特に大きな混乱はない。とはいえ、実際に動き出してみても気づいたことや反省点もある。例えば、ある学年には同じサービスでは不足であることやメールでのやり取りのみだと質問の意図をはかりかねることが多いこと、きちんと発信したと思っている情報も正確に伝わっていないことなどだ。こうして並べてみると、この状況下ではなくても日頃から気をつけねばならないことだ。しかし、状況が変わるとまた違った角度からの気づきやアプローチが必要となり、改めて相手が真に求めていることへの推し量りや質問方法、情報の伝え方の大切さを痛感している。そのバランスが取れたとき、+αの図書館サービスを提供できるのではないだろうか。引き続き、図書館は状況に応じて都度検討し、改善可能なことは実施していくつもりだ。新型コロナウイルスとの生活はしばらく続きそうなので、このウイルス視点込みで図書館も変化し続けるだろう。

経験したことのないことを想定するのは、難しい。想定外なことも必ずといっていいほど起きる。ましてや、今回のように起きてほしくない状況の中で考えるという作業自体楽しいものではない。しかし、これまで普通だと思っていた日常を意識して考え、行動するようになる。良くも悪くも考え方が変わると行動も変わり、結果も変わる。世間の様子を見てみると、そういったことが新しい始まり・変化のきっかけになっていくようだ。例えば、これからは多くのイベント等がオンライン型とオフライン型のどちらか、または複合型を選択できるようになるのではないだろうか。それぞれの長所を活かして新しく広がる世界があることを一部の人のだけでなく、多くの人が分かってくる。今はあらゆるものが進化している途中なのだ。そう考えると、暗い話題の多いときには明るい気持ちにもなる。

それにしても、先行き不透明感が一番困る。世間では「withコロナ」とよく聞くようになったものの、肉眼では見えないし本当に困ったもの。近くにきたら蛍光色に光るとか、触れそうになったら本人にだけ聞こえるような優しい音がなるとか、何か目印をつけてくれないだろうか。



入館ゲート付近の消毒液



自動貸出機にも透明のシートを貼り適宜消毒を実施中
その付近には、消毒液も設置



たゆたえども沈まず

芸術の森キャンパス・ライブラリー司書
山田 恵里

フィンセント・ファン・ゴッホには、彼を兄弟として、支援者として生涯支え続けた弟、老舗「グーピル商会」画商のテオドルス（愛称テオ）がいました。このお話は、セーヌ川のような激流の19世紀西洋美術の世界に頼りなくなつたゆたひながら、決して沈まなかった兄弟の物語です。

物語の一番の魅力は、パリやフランス各地の美しい情景とともに描かれる、ゴッホの儚い人生とゴッホを支えるテオドルスの献身です。テオドルスは、いつか絶対にゴッホの絵が評価されると信じて、絵具代や生活費に使えるように、仕送りを欠かせませんでした。自分の画廊から、ゴッホの絵を送り出すことが夢だったので。

ゴッホもまた、何度も人生の転機を経験し、スランプに悩み、酒に溺れながらも、絵を描くことをやめられませんでした。テオドルスの期待に応えなかったからでもあります。この小説をお手に取った方には、兄弟の絆の行く末を見届けていただけたらと思います。

実際にゴッホが家族や友人とやり取りした手紙はまとめられて出版されましたが、弟テオドルスとの間には、数百通の手紙が行きかいました。ゴッホが精神的に落ち込んでいるときには励まし、ときには叱咤の手紙を送りました。手紙の詳しい内容

は「ゴッホの手紙」(岩波書店、1978.9)などからわかりますが、この小説は手紙と共通点が多々あります。

また、この小説には、19世紀後半の西洋美術の世界の移り変わりが描写されています。権威あるアカデミー出身の画家たちの古典的な絵画がサロンの一等良い場所を飾る中、当時はなかなか受け入れられなかったモネら印象派の画家が生まれ、パリ万博で浮世絵が展示されると一気に浮世絵ブームが広がり、浮世絵に影響を受けたジャポニスムが生まれた様子が著者によって描かれています。

浮世絵に影響を受けた印象派画家であり、ついぞ生きている間は評価されなかったゴッホは、その激流の時代をどう生きて、どんな絵を描いたのでしょうか。この小説を読むと、史実の西洋美術史や、既存の価値観を覆して評価を受けていった印象派画家たちの軌跡にきつと触れられることと思います。

興味を持たれた方は、是非お手に取って頂ければ幸いです。

参考文献

原田マハ「たゆたえども沈まず」幻冬舎、2017
芸術の森 2F 一般図書 913.6/Har

だれかとどこかへ：東京お散歩案内

桑園キャンパス・ライブラリー司書
作本 美沙

コロナが流行し、約半年と数か月ほど経ちました。皆様はどのように過ごしていますか？私は食べ歩きや旅行が好きで、落ち着いたら行きたい場所の情報収集や美味しそうな料理の画像などを眺めています。早く遠出がしたいですね。

さて、今回紹介する図書は、筆者が友達や恋人など「だれか」に案内をしてもらった街の素敵なお店や場所、美味しそうな料理などを紹介しています。文章だけではなく、可愛いイラストや写真が多く、分かりやすかったです。

特に気になった街はp72～「谷中・根津・千駄木」エリアです。ここで紹介されている「谷中ぎんざ商店街」には行ったことがあり、猫がたくさんいる懐かしい雰囲気や漂う商店街でした。入口にある「夕焼けだんだん」という階段の名前の響きがとても良くて素敵です。当時は帰りの飛行機に向かう途中に立ち寄ったため、全てを見ることは出来なかったのですが、「やなか健真堂」というカフェで食べた「水あんみつ」がとても美味しかったことを思い出します。また行く機会があれば商店街はもちろん、このエリア全体を散策する予定です。特に明治16年(1883年)に建立された「全生庵」というお寺には興味がありま

す。毎年8月に行われる「円朝まつり」というお祭りでは、境内にお墓がある三遊亭円朝という人物が収集していた幽霊画が公開されます。オカルトも好きなため、死ぬまでに一度は鑑賞したいです。この他に、西荻窪や下北沢、千葉県の銚子など行ったことのないところも多く、終始「楽しそう!! 行きたい!!」と心の中で連呼してしまうほどワクワクしながら読みました。

私はどこかへ行く計画を立てるときにはSNSで情報収集していることが多いのですが、雑誌やテレビ、図書も参考にすることがあります。その中でも図書、特に今回のようなエッセイは、街の紹介以外に筆者のその時の感情や状況などの描写から、場所のイメージを膨らませやすく、その場所に行った気分になれるため、計画の段階からとても楽しいです。皆様も旅のお供に、また、おうち時間のお供にも、1冊いかがでしょうか。

参考文献

鈴木ともこ「だれかとどこかへ：東京お散歩案内」祥伝社、2006
桑園 一般図書 291.36/Suz

附属図書館 貸出・視聴ランキング

集計期間：2019/4/1～2020/3/31

※同率順位の図書が多数あることから、今年は3位までの発表とさせていただきます。



図書貸出ランキング

- 芸術の森 -

AV視聴ランキング

No.1 アフタヌーン・ティの楽しみ：
英国紅茶の文化誌
出口保夫著/丸善/2000 芸術の森 1F 文庫新書 080/Mar/329

No.2 けっきょく、よはく。余白を活かしたデザインレイアウトの本
ingectar・e著/ノジム/2018 芸術の森 2F 一般図書 674.3/Ing
No.2 一杯の紅茶の世界史
磯淵猛著/文藝春秋/2005 芸術の森 1F 文庫新書 080/Bun/456

総 評

「けっきょく、よはく。」(ingectar-e著)は元々人気が高いデザイン書ですので、図書館でも実際に借りていかれる学生さんを何度かお見掛けしました。こちらは余白を使ったレイアウトデザインのNG例・OK例を横並びで比較し、解説しているため、デザイン初心者の方にも大変分かりやすい内容となっております。毎年数多くランクインするデザイン書の中でも、群を抜いて貸出率が高いです。また惜しくもランキングには入りませんでしたが、『スケッチ感覚でパースが描ける本』(中山 繁信著)、『間取りの方程式 心地よい住まいを組み立てる技術』(飯塚 豊著)といった建築関係の図書も人気がありました。(芸術の森キャンパス・ライブラリー：結城)

図書貸出ランキング

- 桑園 -

AV視聴ランキング

No.1 質的研究への挑戦 第2版
舟島なをみ著/医学書院/2007 桑園一般図書 492.907/Kay

No.2 病気がみえる7 脳・神経
医療情報科学研究所編/Medic Media/2011 桑園一般図書 (最新2版/2017) 493.73/Iry

No.3 質的研究実践ノート：
研究プロセスを進めるclueとポイント
萱間真美著/医学書院/2007 桑園一般図書 492.907/Fun

総 評

例年人気の『病気がみえる』シリーズは、今年も安定して貸出回数伸びていました。また、貸出上位のほとんどをシラバス指定図書が占め、1位と3位には「質的研究」に関する図書がランクインしました。授業内容についての確認や理解を深めたり、レポート作成に利用したりする学生の貸出が多いことがわかり、図書館の本が学習に活用されていることを非常に嬉しく思います。(桑園キャンパス・ライブラリー：戸間替)

No.1 シャイン
スコット・ヒックス監督/ジャン・サルディ脚本/パイオニアLDC/1996
芸術の森 1F AV 778/Shi

No.2 Vicky Cristina Barcelona
written and directed by Woody Allen/アスミック・エースエンタテインメント/2008
芸術の森 1F AV 778/Vic

No.3 Paprika
今敏監督/筒井康隆原作/水上清資脚本/ソニー・ピクチャーズエンタテインメント/2007
芸術の森 1F AV 778.77/Pap

総 評

昨年に引き続き、今年も洋画が上位を占めています。(ランキング2位のVicky Cristina Barcelonaの邦題は、ウッディアレン監督・脚本「それでも恋するバルセロナ」です。) 3位の「Paprika」は筒井康隆原作・今敏監督のSFアニメです。原作本も芸森図書館にありますので、興味がある方は併せてチェックしてみてください。3位以降には、今敏監督「東京ゴッドファーザーズ」細田守監督「時をかける少女」新海誠監督「君の名は」「言の葉の庭」があがっており、日本の若手監督(故人も含みますが)のアニメの根強い人気も伺えました。(芸術の森キャンパスライブラリー：岡井)

No.1 呼吸・循環・代謝
(看護教育シリーズ。目で見える新生児看護:vol.3/胎外環境への適応生理:1)
医学映像教育センター制作著作/医学映像教育センター/2010 桑園 AV 492.921/Med/3

消化・神経・成熟徴候・外表 (看護教育シリーズ。目で見える新生児看護:vol.4/胎外環境への適応生理:2)
医学映像教育センター制作著作/医学映像教育センター/2010 桑園 AV 492.921/Med/4

No.2 妊婦健康診査と保健指導妊娠初期 (看護教育シリーズ。目で見える母性看護:Vol.1)
斎藤いずみ原案監修/医学映像教育センター/2003 桑園 AV 492.924/Med/1

妊婦健康診査と保健指導妊娠中期 (看護教育シリーズ。目で見える母性看護:vol.2)
長浜逆希子原案/医学映像教育センター/2003 桑園 AV 492.924/Med/2

分娩1～4期の看護実践 (看護教育シリーズ。目で見える母性看護:vol.6/分娩経過のアセスメントと看護)
世木菓子原案/医学映像教育センター/2007 桑園 AV 492.924/Med/6

総 評

今回のランキングは、例年人気の医学映像情報センター「看護教育シリーズ」のうち、『目で見える新生児看護』と『目で見える母性看護』が独占する結果となりました。また、貸出全体をみても母性看護領域のDVDがほとんどを占めており、3年生の母性看護実習の時期にあわせた利用が多く見受けられました。(桑園キャンパス・ライブラリー：戸間替)

機関リポジトリのご紹介

みなさん、「機関リポジトリ」をご存じでしょうか?『機関リポジトリ』は、「電子的な知的生産物を保存し、原則的に無償で発信するためのインターネット上の保存書庫」(文部科学省HPより)のことで、国内外の大学においてリポジトリのシステム構築と公開が進んでいます。札幌市立大学でも、教職員ならびに大学院生等が行った教育研究活動の成果をインターネット上で無償提供しています。毎年発行されている「SCU Journal of Design & Nursing」では、これまで115本のオリジナルな研究成果が発表されています。また、博士論文として提出された13本の原著をPDFデータでみることができます。

その中には、『まちづくり市民活動団体の人材マネジメントに関する組織論的研究』(飯谷 祐介、学位論文)や、『「まちの健康応援室」有資格ボランティアとの協働による健康支援活動ー「まちの健康応援室」継続利用による効果検証ー』(原井 美佳 他、SCU Journal of Design & Nursing 第13巻、pp.3-15)のように本学の人間重視の理念の具体的な学術的な研究成果が多数収められています。また、『札幌市立大学芸術の森キャンパスに自生する植物の和名とアイヌ名の由来分析』(津田 唯子、矢部 和夫、SCU Journal of Design & Nursing 第12巻、pp.3-10)のように芸術の森キャンパスを題材としたユニークな研究資料もあります。ぜひ一度ご覧ください。(金子 晋也)

機関リポジトリURL <https://scu.repo.nii.ac.jp/>